

知床適正利用・エコツーリズム戦略 第2回起草部会

日時：平成23年2月9日(水) 13:30～16:30

場所：標津町生涯学習センター「アスパル」

参加者：本間氏(羅臼遺産) 長谷川氏(羅臼観光船) 石見氏(羅臼遊魚) 寺山氏・坂部氏(知床財団) 遠山氏(斜里山岳会) 河井氏(斜里町) 長岡氏・遠嶋氏(羅臼町) 中鍵氏、上野氏(林野庁) 樋口氏(北海道) 則久・荒畑・伊藤・野川・中村・中川(環境省)

## 1. 会議の概要

前回までの起草部会での意見を踏まえ、事務局にて戦略素案を作成。

それに基づき、戦略の具体的な内容について協議した。

## 2. 主な意見

骨子に共通の将来目標が必要。(素案に対しての意見)

将来目標は具体的に。達成状況がはかれるもの、評価できるものにする。

目標・・・自然を守りながら経済がまわること。地域を守ることになる。

情報発信のバランスを同じにする。(現在はウトロに偏っている)

自然保護と利用の割合、線引きをあらかじめ設定する必要がある。

判断の基準となる共通の価値観、基本的な理念が必要。(なにを守るか。森が優先等・・・)

担保となる法的規制が必要。自主ルールでは限界がある。戦略にも同等の力が欲しい。

保護は重要だが、利用できる目安、利用できる場所のゾーニングを行う。

保全し利用しない場所があってもよい。ブランドの価値につながる。

ゾーニングに際しては、テーマパーク的な発想も考えられる。(ニーズ、資源の分析、楽しませ方、ブランド化)

ゾーニングに関して

既存の法規制の整理が必要

規制ではなく、守るべきルールを伝える。

誰も入れない場所があってもよい。

文化・歴史面での視点も必要。

持続可能にするために、人数制限も検討可。(検証する体制が必要。巡視・・・)

会議をやるだけでなく利用者のニーズ把握のアンケートなど、やれることからやることも必要。民間が協力する。

課題よりも基本的な考え方が先。課題は背景として扱う。(素案に対しての意見)

価値を持続的に伝えるという表現はより具体的に。(場所、体験を伝える・・・)(素案

に対する意見)

知床の価値という表現について、利用を考えた価値か、生態系の価値か。(素案に対する意見)

単に課題解決のための考え方ではなく、もっと崇高な位置づけが欲しい。結局いつも課題が乗り越えられない。

現実的に解決すべき課題はできるものから取り組むべき。

自己責任に関しては、地域ごとに設定する。

そもそもエコツーリズム、エコツアーが理解されない。町民がわかるもの、小学生でもわかる戦略にする。文章は少なく、シンプルに。

推進体制・・・全て決めてからやるのではなく、できることからやる。検討会は監視の場。

利用プランを提案・検証できるしくみが必要(申請、判断、許可)

検証の基準をどの程度書くか。かなり詳しく書く必要性があり難しい。

アイデア：優先順位の明示。利用者の評価を基準とする。利用上限を決める。

問題を提起して議論出来る場が必要。

グレーのままにせずに、検証が必要。(シマフクロウ、ワシの餌付け等)

巡視体制が足りない。ボランティアでなく、巡視要員を雇う。



会議の様子

